



新潟大学の酒

松涛

No.23

2007. 3. 5

主な記事

学部長挨拶	2
同窓会長挨拶	3
今年度の活動計画	3
農学部を去るにあたって	4
支部だより	7
特集…親子二代で農学部	10
ペンリレー 同窓生からのたより	12
職場紹介 — 水土里ネット新潟 —	14
学部だより	15
編集後記	16

農学部 最近の状況

農学部長 鈴木 敦士



私が農学部長に就任してから約三年半が経過し、松涛への執筆もこれが最後となります。

大学が法人化されてから三年が経過しようとしています。文部科学省が実施する年度毎の「業務の実績に係わる評価」の他に外部評価機構による「認証評価」の準備が進められています。新潟大学でおこなわれている教育が大学として相応しいものかどうかの評価されます。大学からの評価書の提出は十九年六月頃を予定していますが、高い評価を得るべく大奮闘です。

学部を眼を転じますと、現在農学部には寄せられた課題の一つに、如何にして学部への

入学志願者を確保するかがあります。志願倍率が二倍を割る年が続くと、その学科、学部の存在価値が問われます。現在学部全体では志願倍率二倍を確保していますが、学科

によって二倍を割っているところもあります。学部ホームページの充実、高校での出前講義、オープンキャンパス、スーパーサイエンス・ハイスクール（指定された高等学校と協力しあつて、大学理系への興味を起こさせるプロジェクト）活動等、懸命な努力を続けていますが、十八歳人口の減少とも相まって、志願倍率をあげるのには並み大抵ではありません。理科離れが報じられている昨今、本学の理学部・工学部でも同様な問題が生じています。生物系の落ち込みは工学系、化学系や数物系に比べればまだ良いかもしれませんが。

食の安全・安心への関心の高まり、食料資源の確保、地球温暖化や水質汚染等の環境問題等々、農学部の扱うべき課題は多く、これからは農学部の時代であると考えています。このことは機会のある度に喧伝していますが、志願者の確保には同窓の皆様の御協力をお願い申し上げます。また、時代の要求にあつた農学部を再構築するために将来計画委員会にて検討を進めています。成案を得るためにはもう少し時間がかかりそうです。

面白い話としては農学系、医歯学系、工学系、教育人間科学系の垣根を超えてバーチャルな形で活動してきました。新潟大学コア・センター「地域連携フードサイエンス・センター」が平成十九年度概算要求事項として、文部科学省から財務省に送られたという内示を得ております。十九年度予算の財務省原案が出来上がる（十二月下旬）までは樂觀は許せませんが、要求が認められれば、予算的にも人的にも活動が活発となり、農学

部のさらなる躍進をもたらすとともに、新潟県食品産業の発展にも貢献出来ると思います（この松涛が皆様のお手元に届くころにセンター設立準備に大忙しである事を念じています）。

皆様御存知のように、最近は大ブランドのいろいろな物産が販売されています。

農学部では米、大根、馬鈴薯、西瓜等、季節に応じた産物を販売してきましたが、これに新潟農場栽培の酒米（五百万石）を使った新潟大学のマークをつけた純米吟醸酒が加わりました。三年前から学部と連携協定を結んでいる長岡市小国町で栽培された酒米（二本）を使った純米吟醸酒には「新潟大学と共同開発」という表示がありますが、今回の酒はズバリ「新潟大学の酒」です。御愛飲賜れば幸いです。

大学の現況と学部の活動状況について述べてきました。が、同窓会の皆様の変わらぬ暖かい御支援をお願いして、御挨拶いたします。

新潟大学全学同窓会設立記念式典・祝賀会が開催されました

平成18年5月27日（土）初夏を思わせる陽気の中、新潟市西堀にあるホテル「イタリヤ軒」で、4月1日に設立された新潟大学全学同窓会の設立記念式典が同窓生二百余人が参加する中盛大に開催されました。

式典は、柳本会長挨拶の後、長谷川学長からの祝辞、神保出納長（県知事代理）及び上原新潟商工会議所会頭の来賓祝辞があり、その中で昭和24年6学部による新制大学スタートした新潟大学が半世紀の歴史を経て、9学部、6大学院、学生数1万2千人、教職員数2、400人、卒業生9万人を超える総合大学として発展していることが紹介されました。引き続き役員の紹介が行われ、小林農学部同窓会長が理事として紹介されました。

その後なごやかな雰囲気の中で、祝賀演奏、祝賀会が行われ全学同窓会の交流が進められました。

新潟大学全学同窓会の活動について

同窓会長 小林 一三



会員各位におかれましては、2007年の新春を迎えられ、益々のご健勝とご活躍のことと察し申し上げます。

同窓会の活動につきまして、機関紙「松涛」の通りであります。今年度は名簿編纂の年となりますので、格別のご協力をお願いいたします。

さて、新潟大学は国立大学法人となり、国際的な競争力のある、個性豊かな開かれた新しい大学を目指して、大きく前進しようとしております。

これに呼応して、各同窓会も二年間の連絡協議会を経て、平成十八年四月一日、新潟大学全学同窓会が発足することになりました。

九つの同窓会の会員を中心に、大学院など新潟大学関係すべての卒業生、修了生、教職員、協賛企業や個人などにも参加してもらい新潟大学を強力に応援して行くことになりました。

この全学同窓会の管理、運営は各学部同窓会、校友会の代表

が理事となり、事業計画や予算、決算など重要事項を審議します。実務は各同窓会、校友会の中から選出された運営委員が役割を分担、運営し、これまでの各同窓会の活動は今までもおりとなります。

全学同窓会の具体的な活動はすでに始まっております。

「シンボルマーク」は、基本型である「雪の結晶」を歴史ある新潟大学の記号として、広く社会に向かって自立して行くイメージを、可能性を秘めた、個人を象徴した正円で表わし、シンボルな造形となっております。

広報誌「雪華」は、すでに五号の発行となり、全学同窓会の支部設立も、首都圏について沖縄、そして佐渡にも過日盛大に、学長、会長出席のもと設立されました。今後各地に支部ができますことを期待しているところであります。

記念講演では、中村修二氏の「青色発光ダイオード開発」について、昨年は松本市壽氏の「ピルゲッツと良寛」でした。お蔭さまでホテルの会場は満席の盛会でありました。

そしてクレジットカード事業であります。この呼称を「新潟大学カード」とし、カードの表面には、「UNIVERSITY」となり

ます。会員各位のご賛同とご協力をお願いいたします。

UNIVERSITY」となり、自然災害の多くが局地的で、しかもその強度が極端に強いことが指摘され、従って被害も大きくなっております。

これに対し、どう取り組むかが大きな課題となつてきました。終わりに、会員各位におかれましては、政治、経済、社会とも多端な折、今年も明るく元気で活躍されますことを祈り、会長挨拶といたします。

自然災害は恐ろしい。最近の

2006年度活動計画

幹事長 三沢 眞一

前幹事長の山本仁志さんからバトンを受けて今年度から幹事長を仰せつかる事になりました。微力ですが、農学部同窓会の活性化に努めてゆきたいと思

いますので、宜しく願ひします。

同窓会を取り巻く環境の中で、今年度大きく変わった点としては全学同窓会の発足が挙げられます。全学同窓会は大学当局が支援団体としての期待を持つていたため全面的な協力態勢をとつています。またこれまで新潟大学の中で活発な事業を展開してきた学部の同窓会がリーダーシップを取つていたため、発足当初から活動がアクティブです。したがって今後農学部同窓会としても全学同窓会と足並みを揃えて活動してゆく場面が多くなると思ひます。全

自然災害の多くが局地的で、しかもその強度が極端に強いことが指摘され、従って被害も大きくなっております。これに対し、どう取り組むかが大きな課題となつてきました。終わりに、会員各位におかれましては、政治、経済、社会とも多端な折、今年も明るく元気で活躍されますことを祈り、会長挨拶といたします。

で昨年発行予定のものを見送つて来ました。幹事会で承認された検討委員会で審議した結果、発行に踏み切ることにいたしました。同窓会名簿は同窓会の活性化のシンボルであり、名簿の発行なくして同窓会の発展なし、と考えています。現在、来年の発行を目指して作業を進めています。今後は住所や電話番号など個別に掲載の有無を会員の皆様に聞いて対応することになります。同窓会として名簿広告を依頼しないなど、名簿が関係者外へ流出しないように注意をして行きたいと考えていますので、会員の皆様方からはできるだけ掲載可ということ返事をいただきたいと願つていま

す。

昨年度から同窓会のホームページを立ち上げ、農学部のホームページからリンクをはつてありますので、ご覧いただきたいと思ひます。同窓会として、もできるだけ新しい情報を載せ、充実して行きたいと考えています。

皆様にお届けする松涛も、内容が年を追って豊富になってきました。スタッフを補充して紙面の充実にも努めてゆくことになりました。

この他、例年通り学内行事や、「農学部フォーラム」など学内で行われる学術・文化活動へ支援を続けて行きたいと考えています。

今後ともご支援を宜しく願ひいたします。

農学部を去るにあたって



農学部を去るにあたって

楠原征治（農業生産科学科）

1970年4月に、当時新潟市小金町にありました新潟大学農学部にて赴任しまして、はや37年の歳月が流れました。これまでの人生の半分以上をこの農学部で教育・研究に携わってきたことになりました。教育・研究という職業上の充実度は、年齢的とともに遥かに大きくなってきたように思いますが、私の教育・研究、いや、人生そのものに対する考え方は、一口で言いますと「何事も楽しくやりたい」に尽きます。この考え方で、教育・研究はもちろんのこと、種々の遊びも含めて多くの学生とともに楽しく、大学生活を過ごしてきたように思いま

す。私はこれまで、動物のカルシウムと骨代謝一筋に研究をしてきましたが、新潟大学赴任以前は山羊のクル病などを実験的に作製したりして、その発現機構を調べたりしておりました。新潟大学に赴任当時、これまでの研究を続けることは困難であることを痛感し、新たな研究を模索しておりましたところ、鳥類の産卵期のみに発現する骨髄骨(medullary bone)に出会い、この「骨髄骨の構造と機能に関する研究」を続けてきました。この研究で数名の学生に博士の学位を授与するこ

ともできましたし、また多くの修士論文や卒業論文に纏めることができましたことを嬉しく思っております。1978年から2年間、アメリカのペンシルバニア州立大学に留学することができましたが、この留学の折に当時アメリカやヨーロッパで大きな問題となっておりまして「豚の脚弱と骨軟骨症 Leg weakness and osteochondrosis in pigs」に出会い、帰国後、学生とともにこの骨軟骨症の発生実態や発現機構、また診断技術の確立にも取り組むことができました。この課題でも博士論文をはじめ修士論文、卒業論文として纏めることができましたことを喜んでおります。50歳を過ぎましたところから、これまでの基礎的研究を基に、社会的に貢献できないかとの思いが強くなりまして、企業や団体とともにカゼインホスホペプチド(CPP)など、新素材が動物のカルシウムや骨代謝に及ぼす影響を新たな研究の柱に取り上げ、学生とともにこれらの研究にも携わってきました。これまで

に私を支えてくれました学生諸君や教職員の皆様に心からお礼を申し上げます。この10年間余り、農場長、フイールド科学教育研究センター長、副学部長、評議員などの役職を仰せつかりましたが、その任務も無事果たし得ましたことは、皆様方の絶大なご支援とご鞭撻の賜物と感謝いたしております。最近



農学部を去るにあたって

鈴木敦士（応用生物化学科）

は学生の名前を思い出せない、つい同じことを話し、そして聞いてしまうなど記憶力の低下、つまり修復のきかない脳細胞の消滅が目に見えるようになってきましたが、人

生80年と言われておりますことから、これからは脳細胞の劣化を多少なりとも食い止めるのに役立つことをしたいと考えております。終わりに、新潟大学農学部同窓会の皆様のご健勝とご発展をお祈りいたします。

私が畜産学科助手として昭和四十六年九月に小金町の木造校舎に赴任してから、すでに三十五年が経過した事になります。月並みな表現ですが月日の経つ速さを実感しております。農学部は昭和四十九年に五十嵐地区の新校舎に移転し文字どおり総合大学の一員となり、発展をとげました。その校舎の老朽化とともに私も年を取り定年を迎えることになりました。この間に様々のことがありましたが、教育及び研究面での思い出を一つ

ずつ挙げてみたいと思います。《教育面》赴任当初、卒業論学生が滞留しているような教室でしたが、少しずつ解消され、教室の設備も整備されるようになりました。それに伴って学部卒業生、修士の取得者も増え、それぞれの分野で活躍しています。博士課程設置後は、当教室からの博士の学位取得者（論博二名を含む）が十名になりました。その中には三名の留学生も含まれ、それぞれ母校に帰って助教授として活躍しています。三十五

文学者を、大学院自然科学研究科の教員として招き、7年間、共に汗を流したことや折々の討議は、計り知れない大きな財産です。多くの皆様方の励ましとご協力のおかげ

で、実のある10年間であったことに感謝申し上げます。最後になりましたが、お世話になりました皆様方、ありがとうございました。



農学部を去るにあたって

中野 俊郎 (生活環境科学科)

昭和23年に満州から引き上げてきたとき、福井地震のため国鉄高山線で富山に帰国しました。在学中の昭和39年に新潟地震に遭遇し、2004年には中越地震を体験し、地震に縁がある気がします。帰国後、NHK朝のラジオ体操が始まり、それを取り仕切る年齢18歳ぐらいのヤクザのお兄ちゃんがいて、体操の後、町内を竹箒で掃除させられ、終わると親分に挨拶に行くと云われました。何で親分に挨拶しなければならぬのかと疑問に思っていたら、いきなり竹箒で頭を殴られ、思わず挨拶してしまいました。それが終わったら、ヤクザのお兄

ちゃんからゲルマニウム鉱石ラジオや真空管アンプの作り方を教えてもらいました。ヤクザのくせに博識だと感じ入りましたが、近所の富山大学工学部の官舎に住む先生に習ったようです。若いときの貴重な体験は忘れないもので、いまでも屋外での計測機器の修理に役立っています。退官後は、町内のヤクザの小父さんか有機農業のボランティアをやり、お世話になったお礼をしたいと考えております。



新潟の10年

平 英彰 (生産環境科学科)

新潟に来てからちょうど10年になります。この間、多くの人たちのお世話になり、満足のゆく仕事ができたと感謝しています。物心がついてから私が生活の場とした地域は青森県、岩手県、長野県、富山県にまたがり、それぞれの地域での思い出があります。新潟県にきて感じたことは、その広い面積のためか、全般にゆったりしていることです。新潟平野から見ると、形態は、実に千差万別で、屏風のようにそびえ立つ立山連峰に遮られるように浮かんでいる富山県の雲に比べ実にゆったりと流れていきます。これは新潟の自然だけではなく、そこに住む人の性格にも現れているように思う。その典型的な例が、お客に対するスーパーのレジ係の対応に見ることが出来る。買い物客が、お金の端数の出し入れにもた

えても、そのままあとの客の商品の入力を続ける対応は、不愉快そのものである。新潟の冬は、雪深く長い。太平洋側に住んでいた人にしてみれば、暗く辛い冬なのかもしれない。しかし、その厳しい冬があるからこそ、新潟の豊かな自然がはぐくまれていくような気がする。これからも、新潟県の豊かな自然の中で、人々が幸せに暮らしていくことを願ってやまない。

新潟市の行政区画

(平成19年4月1日施行)





三十五年への感謝

仲川 洋治 (応用生物化学科)

年にわたる教育面での成果を自分で判断する事は難しいのですが、現在行なっている必修科目の、最後の講義の準備をしている時に、「学生諸君が私の講義をどう受け止めていたのか」とふと気になりました。

〔研究面〕 卒業論文で「筋肉

(食肉)タンパク質に関する研究」の手ほどきを受けて以来、博士課程在学中、米国留学中、新潟大学赴任後も首尾一貫して「筋肉から食肉への変換機構を、筋肉内在性タンパク質分解酵素の作用で解明する」という観点から研究し、かなりの成果をあげる事が出来たと思っております。平成になつてから、「超高压処理による肉質制御」の問題も加わり、西海先生にうまく引き継ぐ事が出来そうなのをとても喜んで

います。
三十五年六ヶ月の長い間大過なく過ごす事が出来た事は多くの教職員の方々のご助力の賜であり、厚く御礼申し上げますとともに、農学部の新なる発展を願ってお別れの言葉と致します。

教養部廃止にともなう配置

換えにより平成6年に農学部

に赴任しました。教養部に22

年、農学部には13年となり、

新潟大学での在任期間は35年

の長きに渡ります。教養部の

助手時代に医学部細菌学教室

との共同研究で、抗生物質ク

ロラムフェニコール(クロマ

イ)に対する耐性菌の耐性機

構の解明に5年間取り組みま

した。この共同研究が、それ

までの私の研究テーマであつ

た「フラロシアニン誘導体の

合成」から、現在の、細菌特

にセラチア(*Serratia*

marcescens)を中心とした研

究に変更させたと言つても過

言ではありません。フラロシ

アニンは青から緑系の有機色

素であり、セラチアもまた強

烈な赤い色素(プロデイギオ

シン)を産生します。色素と

いう共通点に共鳴したのかも

知れません。
教養部では講義、実験等で

多くの学生と接触します。そ

のため、大学生生活4年間の

ある通過点のお世話をしたと

いう感が強く、思い出に残る

ものが少ないのが実感です。

農学部に移り卒研を指導す

ることになったのは私にとつ

て初めての経験であり大変新

鮮に感じました。毎日、朝9

時の打合会が1年くらい続き

ました。二人の学生はさぞか

し大変であつたと思います。

彼らには適応微生物化学研究

室の礎を築いてくれたと感謝

しています。その後当研究室

からはこれまでに35人の学生

が巣立ち、それぞれの分野で

活躍してくれています。彼ら

との思い出は語り尽くせない

ほどたくさんあります。

農学部では教育関連の委員

を主にさせて頂きました。教

育に「絶対」はなく、試行錯

誤することにより、常に何か

を求めて行動していることが

「教育」であるとの感想を持ち

ました。

35年間教育と研究を続けて

こられたのは、多くの優秀な

学生諸君、共同研究をしてく

ださつた医学部の先生、多く

のご教授をいただいた旧教養

部、農学部の先生および職員



新潟大学での10年間の教育と研究

杉山 博信 (生産環境科学科)

新潟大学に1997年に着

任しましたので、3月で丁度

10年がたちます。早いもので

す。その間の教育と研究にま

つわる印象深い事柄を述べて

みます。

教育面につきましては、技

術者教育認定(JABEE)

審査の際に基礎資料として必

要なことから、2002年以

降、学期の中間と期末に実施

されている「学生による授業

評価」が印象に残ります。私

は、常に学生諸君の理解度を

確かめながら授業を進めるこ

とを心がけていたつもりです

が、担当した授業科目の評価

は、どれも毎年芳しくありま

の方々のご協力によりです。
心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、農学部の新なる発展を祈念して、感謝の言葉とさせて頂きま

文学者を、大学院自然科学研究科の教員として招き、7年間、共に汗を流したことや折々の討議は、計り知れない大きな財産です。多くの皆様方の励ましとご協力のおかげ

で、実のある10年間であったことに感謝申し上げます。最後になりましたが、お世話になりました皆様方、ありがとうございました。



農学部を去るにあたって

中野 俊郎 (生活環境科学科)

昭和23年に満州から引き上げてきたとき、福井地震のため国鉄高山線で富山に帰国しました。在学中の昭和39年に新潟地震に遭遇し、2004年には中越地震を体験し、地震に縁がある気がします。帰国後、NHK朝のラジオ体操が始まり、それを取り仕切る年齢18歳ぐらいのヤクザのお兄ちゃんがいて、体操の後、町内を竹箒で掃除させられ、終わると親分に挨拶に行くと云われました。何で親分に挨拶しなければならぬのかと疑問に思っていたら、いきなり竹箒で頭を殴られ、思わず挨拶してしまいました。それが終わったら、ヤクザのお兄

ちゃんからゲルマニウム鉱石ラジオや真空管アンプの作り方を教えてもらいました。ヤクザのくせに博識だと感じ入りましたが、近所の富山大学工学部の官舎に住む先生に習ったようです。若いときの貴重な体験は忘れないもので、いまでも屋外での計測機器の修理に役立っています。退官後は、町内のヤクザの小父さんか有機農業のボランティアをやり、お世話になったお礼をしたいと考えております。



新潟の10年

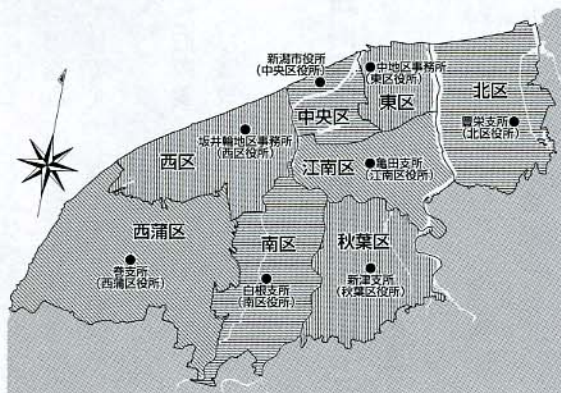
平 英彰 (生産環境科学科)

新潟に来てからちょうど10年になります。この間、多くの人たちのお世話になり、満足のゆく仕事ができたと感謝しています。物心がついてから私が生活の場とした地域は青森県、岩手県、長野県、富山県にまたがり、それぞれの地域での思い出があります。新潟県にきて感じたことは、その広い面積のためか、全般にゆったりしていることです。新潟平野から見ると、形態は、実に千差万別で、屏風のようにそびえ立つ立山連峰に遮られるように浮かんでいる富山県の雲に比べ実にゆったりと流れていきます。これは新潟の自然だけではなく、そこに住む人の性格にも現れているように思う。その典型的な例が、お客に対するスーパーのレジ係の対応に見ることが出来る。買い物客が、お金の端数の出し入れにもた

えても、そのままとのお客の商品の入力を続ける対応は、不愉快そのものである。新潟の冬は、雪深く長い。太平洋側に住んでいた人にしてみれば、暗く辛い冬なのかもしれない。しかし、その厳しい冬があるからこそ、新潟の豊かな自然がはぐくまれていくような気がする。これからも、新潟県の豊かな自然の中で、人々が幸せに暮らしていくことを願ってやまない。

新潟市の行政区画

(平成19年4月1日施行)



支部だより

◆首都圏支部

早いもので、20回目の首都圏同窓会農学部会を6月2日(金)、東京駅八重洲北口大丸ビルホールにて開催しました。当初、鈴木学部長が出席される予定でしたが、県内出張と重なり今回は出席して頂けませんでした。一昨年から始めた講演は、今年は国士館大学体育学部の日下部辰三氏(畜産S50年卒)から、「高地トレーニング」の演題でお話をして頂きました。普段は聞けないような貴重なお話を聞くことが出来て大変有意義な内容でした。引き続き総会に移り、来賓として、首都圏同窓会大石会長、鈴木事務局長、新潟大学東京事務所の上野氏にご出席を頂き、活動報告、会計報告等の承認を頂き総会議事を終了しました。総会の出席者は22名でした。その後、懇親会に移り、出席者同士で旧交を温め、お互い同士の現状などを楽しく語り合うなどして一時を過ごし、四季の新潟を合唱して閉会を致しました。

た。総会の出席者の減少が幹事の悩みとなっております。後輩達の参加を、是非希望致します。

秋に開催される第35回首都圏同窓会総会は11月16日(木)、東京駅八重洲の大丸ビルホールにて開催する予定です。昨年度は久しぶりに農学部が幹事学部となり運営を行いました。今年度は歯学部が幹事学部です。講演は新潟大学歯学部長、山田好秋先生(歯S49年卒)が「あのキャンパスは今」というタイトルでお話を頂く予定になっております。全学の首都圏同窓生が集い、楽しい語らいの場となることを期待しております。

ところで、首都圏では、「新潟大学東京事務所」がJR田町駅近くのキャンパス・イノベーションセンター東京において開設されています。

本東京事務所は、活字化を支援する首都圏在住同窓生の組織として「新潟



大学東京イノベーションクラブ」が昨年7月に発足致しました。会長には首都圏同窓会事務局長の鈴木氏が就任され、副会長には農学部同窓会前会長の金子氏と、医学部同窓会の菊池氏が、更に現農学部同窓会会長の村上氏も役員として会の運営に協力をしております。農学部を含めた全学の会員は50名弱の少数ですので、倍増することが今年度の目標です。

東京事務所では、大学説明会、講演会、産学連携説明会、新技術説明会などを実施しておりますが、10月14日(土)には、平成18年度第2回新潟大学東京事務所講演会が開催され、農学部S46年卒の中澤博司氏(サッポロビール(株))が「ビールを10倍楽しむ方法」のタイトルで講演を行いました。出席者の皆さんの関心も高く、幾つも質問が飛び出しました。とても楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

又、1月14日(土)には、鈴木学部長から「農学部における教育研究活動」についての現状報告もありました。大学の現状を先生方から報告をさせて頂いております。首都圏在住の同窓生の方々に、是非、

積極的に参加をして頂きますようお願いをして筆を擱きたいと思っております。

佐藤 純一(昭47農化)

◆北海道支部

本年度10回目を迎える北海道同窓会は、10月14日(土)に、札幌市の奥座敷、定山溪温泉の「定山溪ビューホテル」で開催されました。

今回は10回目の節目でもあり、北海道の中心地札幌市としました。当日は、札幌とその周辺在住者を中心に10名(内女性1名)が集まりました。

事務局次長として、平成13年版の同窓会名簿をもとに毎回100通以上の案内を出していますが、転居などで毎回数通が「宛名人不明」で返送されてきます。どうも平成に入ってから卒業生に転居・転職が多いようです。

さて、総会は午後5時30分に開会し、井田副会長の開会の言葉、紺谷会長の挨拶と同窓会常任幹事会出席報告に続き、平成18年度事業報告と平成19年度事業計画を協議しました。19、20年度の役員改選では、全員が留任となりました。

た。

総会

に続く

宴会で

は、今

回初参

加の坂

本会員

の乾杯

の後、

各自の



その後、部屋での二次会も又ひとしきり盛り上がりしました。(いつ寝たかはあまり記憶がありません)

15日は、寝不足と二日酔い気味の体調の中、送迎バスでホテルをあとにしました。

今回は平成19年の秋、道北の旭川周辺を予定します。

次回こそ、新潟から本部派遣の来賓を迎えることと、女性同窓生の多数の出席をめざします。

五十嵐龍夫(昭51農)

◆秋田支部

平成18年度の秋田県支部総会は、去る7月8日秋田キャッスルホテルで開催され、役員改選がありました。永年務められた川村陽一会長

は顧問へ、大友捷一副会長が会長へ、加賀屋博行幹事が副会長へ就任し、新体制での本支部運営がスタートしたところですので、よろしく願います。

本支部の活動内容は、夏場に総会の開催と12月第1週土曜日の忘年会が恒例となっております。現在77名の会員を有しますが、参加者が近年15〜20名前後で横ばいとなっていることから、これまでの大学から恩師の招聘、新潟への旅行等を参考にしながら、参加者の増加につながるような活動に取り組んで行きたいと思っています。

さて、秋田県では平成19年9月29日から10月9日まで第62回国体「秋田わか杉国体」が開催されます（冬季大会は2月10〜13日です）。秋季大会では昭和



36年の第16回国体「まごころ国体」以来の開催のため、国体を一過性のイベントに終わ

らせず、地域に根ざした活力あるふるさとづくりを進める大会と位置づけ、地域の魅力を自ら発掘・創造しながら全国に発信するとともに、地域の活性化と連帯感を醸成する新たな契機とするため、県民総力で準備を進めているところです。

大会マスコットは秋田杉、わか杉をモチーフにした「スギツチ」です。国体PRのための「スギツチダンス」なるものもあり、私事ですが、運動不足解消のためスギツチダンスの娘から指導を受け一緒に踊っています。見て楽しい、踊って楽しい国体です。これを契機に秋田県へ来てみませんか。秋田の自慢のお米、お酒、地場名産品で皆様をお待ちしております。

生駒 隆一（昭34農化）

◆福島支部

十月の中旬、近くの阿武隈川に、冬の訪れを告げる白鳥が五羽飛来しているのを見ました。今年の冬は早く訪れるのでしょうか。

県立福島女子高校で定年をむかえ、引き続き私立福島東稜高校に移り、通年五十年に



わたる教職生活に、今年三月ピリオドを打ち、時の流れの速さに思いを馳せて

います。

毎夜、福島市武道館弓道場に足を運び、時々通う県立橘高校（前福島女子高校）弓道場で弓道部の相手をするのが日課となりました。福島女子高校に転勤し、柔道から、五十の手習いで始めた弓道も今ではなんとか蔗を嚼む境に到り、心を空しくして的方向う心境に醍醐味を覚える己に幸福を感じています。

この流れの中に、去る七月一日、本年度同窓会幹事会が新潟東急インで開催されました。

小林一三会長の挨拶の中に新潟大学のブランド化、人気度アップの方策が問われている時期にあること、新潟大学同窓会連合会が設立され、全学の中で農学部が存在価値を高めるために、どのような同窓会活動を展開すべきなのかなど、今、本学が益々激動の

渦の中にあることを実感しました。

ささやかですが、高校での進学指導の中で、新潟大学へ幾人かを送り出したことを思い起します。その卒業生も各方面で活躍中であることを、過日の県同窓会総会の席で聞くことができ、この上ない喜びを感じました。今後は県同窓会活動の一環として新潟大学への進学を勧める方策を考慮したいと思っています。

このことは、全学同窓会とりわけ、農学部同窓会として「自主・自律・自立」の精神を掲げてきたこれまでの伝統文化を発展的に継承し、自らの生き方を創造する力を培い未知なる時代を切り開く研究実践を積み重ねる、本学の将来への期待を一層深めるばかりです。

そして、昨年十月二十一日に村杉温泉・室町で開かれた「農学科五期会」に出席したことが思い起されます。

中でも、幹事・赤澤邦欣さんの「北越戊辰戦争の記録」では、慶応四年七月二十七日笹岡を準備する会津藩兵と新発田から南下した新政府軍の間で戦闘がおこなわれ、笹神地域が直接戦火にみまわれ、

同日会津藩陣屋のあった水原も陥落したことなど、戊辰戦争の悲劇が、ここ新潟安田地域まで及んでいたことを改めて知り、会津白虎隊と重なり胸をしめつけられる思いでこの時を過しました。各々の経験、教訓の中に「生きざま」を、五十年前の若き日の昔話に花が咲き、心ゆくまで歓談の輪が広げられました。

それは赤澤邦欣作、漢詩一題「迎友有感」に表わされ、朋友遠来懐旧深 辛酸逝水五十年 酌酒飲情有矜持 垂頭鑽仰賢者念

「次回も一層の元気を蓄積し勇躍して再会しましょう」の呼びかけにまた出かけた。明日の日に生きる糧を「五期会」から与えられるよう、次回も集う人々への想いを胸に今日の日を過します。

高久 英昭（昭32農）

◆長野支部

本年度で節目の第10回目を迎えた長野県支部定期総会（集いは今回で11回目）が、情報交換と懇親会を兼ねて9月16日（土）、長野駅前「油や」で会員11名参加して開催されました。本部からは同窓

会幹事長の三沢眞一教授（生産環境科学科）をお招きして「農学部」の現況と同窓会の動きについてお話を聴きました。

総会では、佐藤支部長の挨拶があった後、松坂副支部長から新潟市で開かれた本部同窓会常任幹事会の報告や手塚事務局次長から会計など報告がありました。また、議事では来年も情報交換と懇親会を兼ねた11回総会を開くことなど決めました。

情報交換と懇親会では、お酒を酌み交わしながら、参加者全員が近況報告として、現在の職場で携わっている仕事の様子や抱負、新潟での過ごした青春の思い出話などの披露がありました。とりわけ、参加した中には六花寮出身者が多く、寮生活での思い出話



や寮歌を歌うなど大いに盛り上がり、楽しい一時を過ごしました。年一回の総会ですが、な

かなか参加される会員が少ないのが課題です。本年度も参加目標人員を20人とし、事務局が勧誘に努力しましたが、残念ながら目標には及びませんでした。これまでの会員の参加状況を調べたところ、初回発足会から今回の10回まで1回以上参加した会員は45人になっています。ここ数年はお馴染みの顔ぶれになっていきますが、参加されると、結構、一日、有意義に過ごして帰るのです。

今回は事務局で参加しやすい計画を練り、目標の20人にしたと考えていますので、本紙面をご覧の会員の方、ご案内通知が届きましたら、気軽に御参加の程よろしくお願いします。

なお、同日、第10回目の節目ということで支部役員の改選が行われました。初回から支部長を務めご苦労を頂いた佐藤正彦さん（6回）が退任され、顧問に選任されました。以下、支部役員は次の通りです。

▽支部長・松坂賢（14回）
▽副支部長・桐山英一（10回）、尾坂壽夫（13回）、西原義久（16回）、今井寛（19回）▽事務局長・手塚光明（19回）▽

事務局次長 黒沢真一（20回）
▽事務局・清水邦雄（16回）、桜井正一（19回）、宮崎広雄（26回）、小松正孝（28回）、増野和彦（30回）、藤本秀樹（40回）

松坂 賢（昭41農）

◆富山支部

平成18年度の富山県支部の懇親会を兼ねた総会は、例年より遅くなりましたが、8月4日（金）に富山市内において55名の会員の参加と、大学本部から農業生産科学科「花井園芸学講座」の新美芳二教授にお越し戴き開催しました。

新美教授から、大学の近況として、大学の法人化に伴い受験者数の確保も大切になってきていることや、4年制大



学終了後も修士課程に進学する学生が多く、なつてきている等について話されておりまし

懇親会では、お越し戴いた先生の教え子や関係会員が先生を取り囲み、また久しぶりに再会する会員同士の話に花が咲き大いに盛り上がりつていました。懇親会の締めは、恒例の農学部学生歌を参加者全員で肩を組みながらの合唱でした。

支部の年会費（1,000円）の徴収も、多くの役員の努力と会員の協力により6割強の会員から会費を戴き何とか健全経営を持続しています。支部だよりは、既に23号を数えており、次号の発刊に向け準備中であります。

会員は年と共に多くなり年齢層も広がっており、役員の構成も検討しなければならぬ時期に来ております。また同時に価値観も少しずつ異なっていく中で会の運営についても検討しなければならぬと考えている今日この頃です。

小林 米和（昭39農）

◆福井支部

福井支部は、平成18年11月10日（金）福井市内において「福井松涛会」の総会を開催し、県内在住の同窓生18名が

出席されました。最初に青木会長からの挨拶の後、今年度で会長を辞任される旨の報告が

ありました。後任には北岡欣一氏（昭和43年卒業）が就任され、今後の抱負を語られました。引き続き行われた懇親会では、各自の自己紹介・近況報告などを行い、思い出話や情報交換等をしてお互いの親睦を深め楽しい一時を過ごしました。

今回の同窓会には、今年新潟大学を卒業し帰郷された3名のうち、2名の方が出席され、最近の新潟大学情報などフレッシュな話題を提供して場を盛り上げていました。

さらに、今回は女性会員が3名出席されるなど、例年になく華やかな同窓会となりました。

来年度も同窓生の皆様に多数のご出席をいたたくよう活動をして参りたいと思っております。

堀 泰宏（平11生環）



特集 親子二代で農学部

父から

池松寿太郎（昭51畜）



卒業後、早稲田大学で30年経ってしまいました。まだまだ卒業時の若い気持ちではいるのですが、周囲を見ると老いたなあと実感させられます。

私は今、富山県砺波市にある食品メーカーに勤務し、食品加工の仕事に従事しております。幸いなことに、会社の近くには温泉が多数あり、帰宅途中によく立ち寄っています。温泉に浸かっていると、日々の疲れやストレスから解放され、非常にリラックスできます。また、帰宅してから晩酌も楽しみの一つです。

先日、テレビ放送での、ある会社の経営者の話の中に「偉くなりたい、有名になりたい、金持ちになりたい、というのを人生の目標にしてはいけない。なぜなら、友達がなくなるからだ。」と、ありました。幸か不幸か、私には地位も名誉もありませんが、

友達がたくさんいます。学生時代の友人には、時々会う機会がありますが、この時代は思えば花が咲き、青春時代にタイムスリップして、至福の時を過ごすことができます。また、この年齢になりますと、仕事や私生活の面で様々な問題が発生します。このような問題についても気軽に相談できる学生時代の友人は、非常に素晴らしい存在です。娘にも学生時代の友人を大切にして、これから起こるであろう様々な問題に対して、良きアドバイザーとして、素直に意見の言える友達として、いつまでも互いに切磋琢磨していつてほしいものです。

最後になりますが、今回は「親子孫三代で農学部」という企画で特集が組めるよう、新潟大学農学部の更なる発展を期待しております。

娘から

池松優子（農4年）



地元の富山を離れ、農学部に入學して4年が経ちました。ついこの間、一人暮らしを始めたと思っていました

が、入学当時の何も無かった部屋の中には、4年分の荷物と思い出が蓄積されており、部屋を見回すと4年という月日を実感してしまいます。現在、卒業を目前にして、卒業研究に取り組む毎日です。私の農学部への入学が決まったとき、一番喜んだのは父でした。入学手続きの日も、引越しの日も父は本当に嬉しそうで、30年前と今の新潟の町並みを比べて楽しそうに話していました。父はよく大学の時代の話をしてくれませんが、本当に楽しそうで誇らしそうです。父の大学生活はたくさん友人に囲まれ、とても充実したものだのだと、その話から私は知っています。研究室での毎日は大変ですが、先生方や先輩、後輩、そして友人たちに会える毎日はとても楽しいです。私も父のように残り少ない大学生活を後悔のないよう、楽しく充実したものにしていきたいと思っています。

父から

上村健一（昭46農）



秋を迎える、と、いくつになっても学舎の美しいアカシア並木を思い出します。私は、河渡（現新潟市向陽町）にありました旧農学部校舎の最後の世代でした。

目を閉じれば、まさに赤道の名のごとく赤い色の道、舗装もされずほこりの舞っていたバス道路、小金町のバス停を降りて左方向に斜めに入り、砂丘を少し昇り右に折れると一直線にアカシア並木が続く、並木の間から2階建ての木造校舎が点々と続いています。

裏の砂丘はうっそうとした松林で、その松林の静寂の中に「じゅんさい池」が静かに水をたたえていました。早いものです、もう40年近くが過ぎようとしています。

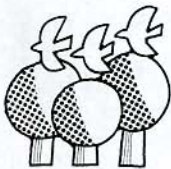
私は、農学科の植物病理学教室を卒業させていただきました。卒業と同時に新潟県にお世話になりましたが、学校時代の不勉強がたたなり、教えていただいたことを農業のためにお返ししないままに、現在は、農学部卒業生として

は少し異色かもしれませんが東京事務所長として東京暮らしとなっています。

国から地方へ、画一から個性豊かな地域づくりへという大きな流れの変化は、地方の責任と主体的な行動が求められるものであり、そういった中で今何をすべきなのかと自問しながら、新潟の豊かな自然や県産品の紹介、企業の誘致などにつとめておりますが、何と言っても、首都圏の方々から新潟を正しくそして深く知っていただき、新潟県の応援団になっていただくことが原点と考えて仕事をさせてもらっています。

申しましたような境遇にありますので、様々な世界で活躍されている方々とお会いする機会に恵まれています。それぞれの道で活躍されている方々は本当に魅力的です。それぞれが活躍されている世界での自分自身に自信を持つことが裏付となっていることとでしようが、決してそれにとどまることなく様々な世界に関心を持ち、幅広い世界を楽しんでおられる人が多く本当にうらやましく感じています。

どうでしょう、私を含めて、新潟県人は、新潟の風土は、ややもすると自分の世界に閉



じこもりがちで人とのつき合いも不得手ではないでしょうか。

県庁の職員の中にも新潟大学の卒業生、農学部卒業生が多いのですが、自分自身のことばに上げて言わせていただきますと、最近の世代の方々、どちらかと言えば、自分の世界以外の事については遠慮するタイプが多いのではないのでしょうか。近々去っていく団塊の世代の一員として、私の息子にも、また同世代の方々にも、少々の間違いや失敗は先に行つてから考えることにして、ぐいぐい自分の道を進んでいって欲しいと考えています。

息子から

上村俊輔（院平15）

気軽な学生の身分から社会人となり、ようやく諸先輩方と同じ世間の荒波にもまれるようになってから、早いものでもうすぐ丸4年が経とうとしています。

私は新潟大学農学部の応用生物化学科を経て同大学の大学院自然科学研究科へと進み、家畜飼養学研究室（現栄養制御学研究室）に籍を置いていました。農学部ではありませんが専攻がどちらかとい

えば生化学寄りであり、恩師である門脇教授、藤村助教授の指示の下、日々ラットの肝細胞と悪戦苦闘していたことを昨日のように覚えております。もちろん、ご多分に漏れず同室の仲間と朝まで酒瓶を抱えて痛飲したことも、あのときの頭痛も含めて忘れられない思い出として心の奥底に刻まれているのですが。

私は現在、地元の食品系会社の開発職に席をおいています。「食」は人々の生活のまさに根幹を成すものであり、なかでも新潟県は日本に誇る食産業の豊かな地域です。自分の生まれ育つた新潟でこの職種に就くことはある意味自分がこれからの新潟を支える覚悟と誇りが必要になるということでもあり、それを考えることが引き締まる思いが致します。未だ独力では自分の仕事すらおぼつかないような状況ですが、いつかは自分が故郷新潟を支える一柱となれるように日々精進をして行きたいと思っています。

また、新潟で食品産業に従事していますと、ことあるごとに大学に縁のある機会が多く、非常に驚かされます。そのような折に見知つた同じ釜の飯を食べた同輩や先輩方と同じ業界にいることを感じら

れることは、なにか強いこととであり、また非常に刺激となることでもあります。縁とは忘れた頃にありがたく感じるものだと思感させられます。

さて、私の両親を含む団塊世代はそろそろ定年を目前に控え、早い人は既に第二の人生へと更なる世界に挑戦を始めた方も多いのではないのでしょうか。前を向いて走り続けてきた羽をしばし休まれるのももちろんですが、できれば今しばらくそのパワフルなエネルギーをお貸し願いたい、というのが本音です。いつか自分が人生の諸先輩方と肩を並べて歩ける日が来るように。そしていつかは自分が誰かの人生の先輩として、少しでも教えるようになるために。甘ったれるなど尻を叩かれそうではありますが、まだしばらくはご教授頂きたい事が尽きることはなさそうです。（苦笑）

二世代で

農学部

小長井正道（昭51農工）
小長井正和（平17生環）

① 近況報告

昭和51年度に農業工学科を



卒業しました静岡県の小長井正道です。私は河渡のキャンパスで学ん

だ最後の学年で、3年の後期には五十嵐に移転し、両方のキャンパスで学びました。

そして、30年近くが経過した平成17年度に、長男の正和が生産環境科学科を卒業しました。

私の研究室は、土地改良研究室で、長男もまた農業水利学研究室と名前は変わりましたが、同じ豊田元農学部部長、三沢教授に御指導を受けました。まさに、親子二世代で両先生方に御指導をいただいたという稀なケースではないかと思えます。

静岡県から本州を横断して新潟へ親子で行つたのは、なぜかなと考えてみますと、私は中学生時代に旧清水市と上越市とで交歓していたので親近感があつたこと。また、長男は私の農学部同級生である新潟県の木村さんと石川県の中村さんと3家族で、小学生から中学生まで毎年キャンプをして交流していたので、新潟大学への憧れのような感情

を持つたのかもしれない。現在、私は静岡県庁に勤務しており、長男も4月から静岡に戻つて土地改良事業団体連合会に入り、共に農業農村整備事業に携わっております。

② 親から子の世代へのメッセージ

私達公務員の職場でも、近頃は就職して1〜2年で辞めていく若者が見受けられるようになりまし。何となく就職するのではなく、好きな仕事に就き「一所懸命」にやってみること。

③ 子から親世代へのメッセージ

社会に出て僅かではあります。が、職場、特に現場に行つて思うのは、大学で覚えた知識だけでは、現実には通用しないということ。ただ、長年の経験やカンといったものは、言葉や文字では正確に伝えられないものです。ですが、だからこそ先輩方にご指導していただきたく思っております。



ベントー 同窓生からのたより

皮肉なことに

小島 誠 (昭36農)



農学部を去って三年。漸く悪い夢は見なくなつた。幸いというべきか。現在、放送大学新潟学習センターにお世話になっている。因みに当センターの初代所長は元農学部長石田一夫先生である。これも縁と慶ぶ。退職後、「にいがた市民大学」なるものを知らなかつた罰で、お世話することになり、ウィルスを取り上げてみた。理由の一つは現役時代真面目に講義をしなかつたこと、さらに新聞紙上にウィルスの活字をやたらと目にするようになったからである。鳥インフルエンザ、エイ

ズ、鯉ヘルペス、はたまた狂牛病等々。新聞記者も読者もウィルスのことは全く知らない筈。どうする？ 現役時代の税金泥棒の罪滅ぼしと一念発起。医学部に藤井雅寛先生を訪ね、自分の壮大？な構想をぶつけてみた。助けて下さるという。そうして昨年の秋から「罪滅ぼし」を敢行した。新型インフルエンザによるパンデミックが起らない裡にこの六月無事講義を終えた。やっと大学を卒業できたと安堵。目下は、放送大学のために営業に努めている。扱、驚くべきことに、此処に通う学生さんの中に農学部同窓生が幾人かおられるのである。五回生のNさん、同期のT君など等。勉強の好きな人々が世の中にはいるものと感心頻。勉強嫌いの自分が生涯教育に携わることになるなんて皮肉といえ余りにも皮肉ではある。カネのかから

ない俳句もボチボチやっている。北大助手時代、学園紛争で見失いそうになった自分を救ってくれたのは五七五の世界であつた。昨年、暇に任せて纏めた句集のあとがきに「自分の俳句は研究生生活の補助翼だつた云々」と書いた処、褒めて下さった方がおられた。俳句に出会えたことの喜びを今更ながら噛み締めている。

次回執筆者は、沖縄で活躍されている昭和50年3月農芸化学科卒業の丸山健一さんをお願いします。

.....

頭髪と体型

武田 宏 (昭58林)



早いもので大学を卒業して二十年以上が過ぎてしまつた。同じ新潟県にいる同級生以外とは顔を合やすことはほとんど無いが、外見では頭髪

と体型がかなり変わったことだろう。

私と言えば、幸い髪の毛は薄くなつていないようだが、父親からの遺伝で真つ白になつてしまつた。初めて髪の毛を染めた時に娘から、「父さん、頭治つたの？」と言われ、少し複雑な気持ちになつたものである。

一方、体型の方は学生時代と比較して一〇キロ近くも太つてしまつた。身体の動かし方は学生時代とそれほど変わりのないで、歳をとるにつれて基礎代謝量が減つてきたのと、アルコール摂取量が多くなつたせいだ。

それだというわけではないが、最近走っている。走り始めた理由は、息子を二〇〇五年夏から村上市の近くで開催されるマラソン大会に出場させているので、父親もちよつと走ってみようと気軽に考えただけだ。二〇〇六年は三回のマラソン大会に出場した。すると、大会前は無意識に走り込んでいたらしく、大会前の一ヶ月の間に目に見えて体重が減つたのである。痩せよ

うと思つて走り始めたわけではないし、食事制限も(アルコール制限も)特別しているわけではないので、こんなにも簡単に体重が落ちてしまつたことに自分でも驚いている。

そこで、この原稿を書くまでに大学時代の体重まで落とそうと思つていたのだが、あと一キロというところで原稿依頼が来てしまつた。せめて、一箇月後には学生時代の体重に戻して、村上市の元旦マラソンを走ろうと考えている。次は、藤巻伸一さんをお願いします。



秋田から

近藤 正 (昭62農工)



1 近況報告

新大農学部・大学院修了後、一年間つくばの研究所に勤務し、秋田県立農業短大に赴任して十二年が経ちました。現在、村役場に勤める今も若くて可愛い妻と娘三人(七、五、三歳)の五人家族で、秋田県の大潟村に暮らしています。水資源学や水理学、測量学の講義と実験・実習を担当し、研究室では、八郎潟流域の水利用と水環境の保全とともに、環境保全型の水田農業と水田の水質浄化機能について研究しています。

平成十八年四月からの独法化。同時に、短期大学部から生物資源科学部へ。四年制の新学科「アグリビジネス学科」として改編を行いました。過疎化と耕作放棄田が秋田

でも目立ちます。若者の就職難。農村での自殺率の増加。思いが馳せます。若い力が活躍でき、農業と農村が輝く日が必ず訪れる。苦境ですが今の苦しみも夢に変えて、新大で授かった確信をもって闘う覚悟です。

2 趣味

食べ歩きと鄙びた温泉を探しながらの水質調査

3 最近、感動したこと

ベスト八位まで

- 一、妻の料理の上達ぶり
- 二、子供の成長に気づくとき
- 三、新潟の災害と復興の闘い
- 四、「水土の知」
- 五、教え子の活躍
- 六、「9条の会」のアピール
- 七、五泉の消防と警察の皆さん

八、韓国の美田を見た帰りの

飛行機から、豊に実る故郷新潟平野を見たこと

4 大学・学生諸君へ

とても提言や意見を言える状況にありませんので、自分に論ず意味で、時間・期日を厳守、これで本当に豊かに進んだ国か？子供に残すこの国はこれでいいのか？、論文を

早く、疑問は深く正確に追究、人生一回でも挑戦は何度でも、ストレスを胃にためるな、たまには酒を飲む、です。

社会や経済の法則、生きた現実の矛盾を学生時にもっと学んでおくべきだったと思います。

5 次回執筆者

研究室の後輩の中川誠さんに、お願いしたいと思っています。

.....

お久しぶりです

渋川 恵理 (平18農生)



皆さん、お久しぶりです。

卒業してから1年半……。

あつという間に過ぎ、研究室にいたことが遠い昔のことのように感じます。県内の食品

スーパーに入社後、新潟市内にある既存店の中でも大型店に分類される店舗に配属され、現在もそちらで働いています。予想外にハードワーク

で体力勝負の毎日です。

大学時代に学んでいたこととはかけ離れた職業についてしまったと思っていました。が、精肉部門に配属になり、ほんの僅かですが畜産の知識が役立っています。それどころか精肉の仕事をすることになって、研修の一環として、取引のある食肉処理場や牛肉卸売業者、ハムなどの加工品メーカーの工場、卵を扱う会社のGPセンターを見学し担当の方から説明や講義を受けることができ、むしろ逆に畜産に関する知識を勉強することができました。

働き始めてほぼ1年間を通して月1回の実技研修のほか新入職員研修や試験があったりと、社内では学ぶ機会が多くあったわけですが、実のところ会社自体が社員だけでなくパートタイマーを含めた全従業員の教育にとっても熱心なのです。特に研修においても、社員の覚える心がけの中においても「自己育成」「自助努力」という言葉が多く語られ、半年に1度提出する自己評価は、何ができるようになった

か、これから何をできるようになるか、自己育成のために何をしているかという質問を問われます。ただ職場と家を往復するだけの毎日を過ごし何もしないなかった自分にとって、自分のために何をしているかなんて、することはもちろん考えることすらしていませんでした。だから改めて自己評価を書いてみたとき、何かしなければということとを嫌でも思いました。

そこで自分で何ができるか考えてみたとき、ちよつとしたことでもいいので新しいことをやってみることにしました。セミナーに参加してみたり、売り場の勉強のためにいろいろなお店を見たり、資格の勉強を始めたり……。

社会に出て1年半。あつという間でしたが、まだまだ自分を成長させる段階です。少しずつですが、自分のできることに挑戦していこうと思っています。

次は池田紀子さん、お願いします。

職場紹介

水士里ネット新潟

(新潟県土地改良事業団体連合会)

小林 由紀雄 (昭56農工)

〈沿革と目的〉

新潟県土地改良事業団体連合会は、前身である新潟県耕地協議会(大正15年設立)、新潟県土地改良協会(昭和26年改組)を経て、昭和32年の土地改良法の改正により翌昭和33年に設立され、現在に至っています。

当会は、農業農村整備事業を行う土地改良区、同連合、市町村、農協を会員とする法人であり、会員が行う事業の円滑かつ効率的な運営を確保し、その共同の利益を増進するとともに、国・県の事業に対する協力を目的としています。

なお、土地改良事業団体連合会は、各都道府県に設けられています。

〈業務概要〉

農業農村整備事業は、食料生産基盤の整備と住みよい農村づくりのために、圃場・用排水施設・農道等の整備や農地保全、農村環境整備及び農村の活性化支援などを行っています。当会では、これらの農業農村整備事業に関して、①会員の行う事業に関する技術的指導・援助、②事業に関する教育及び情報の提供、③事業に関する調査研究、④国・県が行う事業に対する協力、⑤事業推進活動、⑥その他の業務を行っています。

会員への技術的援助や国・県が行う事業への協力として、具体的には事業採択申請のための調査・設計業務(事業計画概要書・事業計画書等

の作成)、事業実施時の測量・詳細設計業務(各種設計図面・設計書等の作成)を行っています。

ます。農業農村整備事業には様々な工種があり、また近年は環境に配慮した整備が求められているため、設計にあ

たっては幅広く専門的な知識と技術が必要となります。これらの業務の他に、土地改良施設診断、土地改良施設維持管理適正化事業など施設の更新に関する業務や、圃場整備・農地の集団化に伴う換地計画書作成・処分登記等一連の換地業務を行っている他、最近ではGIS(地理情報システム)を用いたデータベースの構築やバイオマス関連など、ニーズに合わせて新しい業務

にも取り組んでいます。また、災害発生時には被災を受けた団体への協力を行っており、平成16年に発生した梅雨前線豪雨災害及び中越地震災害では、職員総動員で被災地の測量・調査を行うとともに、査定設計書作成、査定

審査の対応、実施・変更設計書作成で市町村・土地改良区

等の要請に応じました。なお、現在も復旧

工事継続して行っている市町村へ職員を派遣し、発注工事の施工管理・設計書変更等の支援を行いました。

他の業務として、会員に対する各種講習、研修会の開催及び技術指導を行うとともに、事業に関する広報活動、土地改良区運営基盤強化のための助言指導などを行っています。

〈当会の新潟大学農学部出身者〉

当会では、職員総数104名のうち、新潟大学農学部卒業生は14名おり、全員農業工学科及び生産環境科学科出身者で、本部の管理部、技術部、換地部及び技術部配下の支部に在籍し、主に測量・調査・設計等の技術業務で活躍しています。

平成17年4月1日に施行された「公共工事の品質確保に



関する法律」に基づき、農林水産省は「農業農村整備事業工事等の今後の取組方針」を策定し、この中で都道府県土地改良事業団体連合会が発注者支援機関として位置付けられました。これにより、当会の社会的役割が今後益々重要となるため、職員一丸となつて技術力の研鑽と人材育成に努めています。

(写真は、農学部OBですが、県内各地に支部もあるため、全員揃うことはなかなかできません。)

学部だより



故萩屋薫先生

追悼文

石沢 進 (昭34農)

萩屋先生との出会いは、大学2年生の後半から先生の研究室に出入りが許され、ユキツバキの園芸利用の研究に取り組むことに始まる。大学卒業後、研究助手として居残り、バイク愛称「キバツ号」を走らせて県内各地の園芸利用でできる系統の探索が始まる。各地で採集したツバキの穂木を旅行先から先生に送り、留守を守る先生が挿し木を行うなど共同作業で数年後には穂の系統が1500点に及ぶ。また、台湾の野生椿の導入を試み、後には中国の椿探索にも同行する。収集した椿の系統の一部は、新たな品種として公表し、一方ユキツバキに関する生理生態的研究を進めて総合的な研究成果をまとめて発表する。その成果が認められてユキツバキの研究で「新潟日報の文化賞」を授与され

る。先生は大学を退職した後、中国の椿との種間交雑を進め、様々な園芸品種を育成している。1996年に「松下幸之助花の万博記念賞」を授与されている。椿への傾倒を深め、日本椿協会の会長に就任する。

先生は、当初野菜、特に大根の生理生態的な研究を行い、新潟大学では、ユキツバキの研究の他、新潟県が日本でも代表的生産を誇っていたチューリップやボタン・シヤクヤクの研究と新品種育成などで園芸界に多大の業績を残している。先生は、多彩な分野に関心をもち、やり残した様々なことがあり、ご本人も無念に思っておられたに違いない。

晩年には、狛犬、獅子などに関心を持ち、国外の旅行で収集した資料をもとに一冊にまとめるつもりで、目次まで組み立てていたが、目の目を見ることなく終わったことが残念である。

先生の跡継ぎもできず、能力の乏しい私にとつてはただ先生のご冥福を祈るだけである。



故伊藤亮一先生

追悼文

池田 武 (農業生産科学教授)

故伊藤先生は、1954年1月生まれ。東京大学農学部作物学教室を卒業後、大学院の博士課程を修了して助手となり、1987年3月に博士号を取得した。その後6年少々東京大学で助手を努め、1993年3月に本学作物学教室に助教教授で着任した。

本学では、作物の生長、特にイネとダイズに及ぼす水不足の影響を研究した。イネの中に、水不足でないにもかかわらず葉を巻く品種があり、その水分生理を研究し、博士を一人搬出した。

授業は、学部では作物の生理生態学、食用畑作物を、院では環境植物生理学を教えていた。

本学着任当初は、単身赴任で夕方に良く学生とネオン街に……。人柄は温厚で、会議で大声を出すことはなかった。学生同志のソフトボールにも参加して学生との融和をはかっていた。

数年前、奥様と子供さんが新潟に来て、一緒に生活をし

始めた時、病気が悪化し、ここ2年半は休職中であつた。本年9月末に亡くなられた。優秀な先生を失い、非常に残念であり、おくやみを申し上げる次第です。

新任教員紹介

フィールド科学教育研究センター

種田貞義 (農17回、院1回)



河渡時代の農学部を卒業してから40年弱、この4月からFCでお世話になっています。

学生当時は全国的に大学紛争の嵐が吹き荒れ、新大も例外ではなく連日学生集会やオクルグが行われていました。卒業時には全学全体での卒業式はなく、また、学長が辞任していたにもかかわらず、卒業証書は「新潟大学学長代行長崎明」というような時代でした。

その後、新潟県に勤務し、主として農業試験場等の研究機関で現場に近い研究を行ってきました。FCでは現場と大学との連携や学生に現場の面白さや大変さを少しでも知ってもらうために、今までの経験が生かされれば幸いです。よろしくお願いします。

農学部附属フィールド科学教育研究センター

村松ステーション

助手 吉田智佳子



平成18年度4月より、村松ステーションの専任助手(家畜繁殖学)

として着任いたしました。人間の命を支え、自然との協調の場である農業について、自分なりの関わり方を模索してきました。フィールドセンタ―は、生産と教育、研究が同時に行われ、さらに地域との連携もあり、まさに私が探し求めていた場所です。人的、物的資源を最高のレベルで活かしながら、教育、研究に発展的に取り組むことを目標に努力しております。

試行錯誤の日々に、大学時代の恩師の「人にとつて大切なのは、思いやりと謙虚さである」という言葉と、大学院時代の恩師の「常に目的をもって行動(研究)しなさい」という言葉がよみがえります。諸先生方の温かいご指導を頂戴し、学生諸君の素直な探究心に励まされながら、この地で農学を追求できる機会を頂いたことに心から感謝しております。どうぞよろしくお願いいたします。

表紙写真

新潟大学の酒

「新雪物語」ができました！

新潟大学農学部の新通園場で栽培した酒米「五百万石」を使用し、地元内野町の醸造元「塩川酒造」が新潟大学ブランドの酒「新雪物語」を醸造しました。

「純米吟醸生原酒」については、塩川酒造が学内教職員向けに販売し、既に完売しましたが、3月末頃から「純米吟醸生貯蔵酒」が市内の酒販店で販売される予定です。

「新雪物語」の詳細は、下記宛お問い合わせください。

◎塩川酒造株式会社

電話

025-262-2039

FAX

025-261-3262



農学部の動向

平成17年11月以降の農学部の動向は次の通りです。

退職

長年、当農学部のため、また同窓会のために多大なご貢献をなされた方々は平成19年3月に退職されます。

・農業生産科学科

教授 楠原征治 先生
助手 塚口直史 先生

(平成18年11月)

・応用生物化学科

教授 鈴木敦士 先生
教授 仲川洋治 先生
教授 中村 昇 先生

・生産環境科学科

教授 杉山博信 先生
教授 平 英彰 先生
助教授 中野俊郎 先生
助手 佐々木豊 先生

(平成18年9月)

・フィールド科学教育研究センター
教授 三浦慎悟 先生
長年にわたり積み重ねてこられたご功績に心から感謝申

し上げます。ありがとうございました。

会員通信

次の会員の方々が学位を取得されました。

五十嵐 昭 (平元農化)

博士 (工学) (群馬大学)

白井 善彦 (平12生環)

博士 (農学) (新潟大学)

大橋慎太郎 (平12生環)

博士 (農学) (新潟大学)

お祝い申し上げます。

教員計報

山口本治元教授 (家畜管理学) が平成18年9月に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

会員計報

入来院重彬氏 (農15回)

平成18年7月14日

(事務局に連絡のあった方) 謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記

昭和で言えばおそらく昭和82年となる今回の第23号の松涛は、農学部も50年を超える歴史を刻む中で「二世代で農学部」と題して、特集を企画しております。特集をはじめ



口町武道窪の皆さんが、感謝の気持ちを込めて、大学祭でおにぎりをふるまわれたのニュースに接し、嬉しく感じたものです。また、本年は昔で言われる2007年にも当たります。戦後の日本を牽引されてきた団塊の世代が退職を迎える段階が現実のものとなってきました。一方、新潟市は、本年4月に日本海側初の政令市としてスタートをし、新潟大学農学部も西区に所在することになります。今後、人口の減少が現実のものとなり、特に地方で、その傾向が顕著とされる中、地域の大学が、地域と世界に開かれ、そして連携するグローバルな大学であって欲しいと考えております。

平成16年10月23日の中越大地震から、2年以上を経過し、ハード面を中心に、復興は、着実に進んでおりますが、依然、仮設住宅で3回目の冬を余儀なくされた方もおられます。そんな中で、大震災後農学部の皆さんが復興に関わられた川

(H・W)